

森の神話

田辺市立美術館では、私たちの住むこの地を象徴するものの一つである「森」をテーマにした展覧会や講座を、主に熊野古道なかへち美術館（田辺市立美術館分館）を会場にして重ねてきました。熊野古道なかへち美術館の開館20周年の年であった2018(平成30)年には、図書館と共同で連続講座「森と芸術」を開催し、「文学」、「美術」、「音楽」の分野で「森」との関わりの深い作品を制作している芸術家を招いて話をうかがう機会を持ちました。それぞれの分野で注目される活動を展開している芸術家の制作と、その制作を通して考える森の魅力についての話は、改めて森がはらむイマジネーションの可能性を教えてくれるものでした。

そのときの講師の一人で、木を素材に聖性を帯びた彫刻を制作し続けている土屋仁応（つちや・よしまさ／1977～ ）の芸術をお伝えする展覧会を、今年10月から11月にかけて熊野古道なかへち美術館で開催します。

土屋は東京藝術大学および同大学大学院で伝統的な木彫技術を学び、鹿や羊などの動物、あるいは麒麟やユニコーンといった幻獣をモチーフにした彫刻を発表してきました。それらの作品は国内外で



土屋仁応《森》(部分) 2019年 個人蔵

高い評価を得て、現代の日本を代表する彫刻家の一人となっています。古典的な仏像彫刻の技法の応用と独自の方法から生み出される土屋の生き物たちは、どれも静かなまなざしとたたずまいによって、無垢の存在を思わせるものとなっています。土屋の彫刻と接するとき、そこに神話の世界への窓口が開かれているような感覚を抱きます。

今回の展覧会についての協議を重ねる過程で、土屋は「森」ついて、人が意識している理性の世界に対する、無意識の世界が現れ出る場として捉えているということを知ることができました。二つの世界の境界を行き来するような作品を作りたいと言う土屋の意思は、熊野古道なかへち美術館の展示室を、異界の生き物たちが棲む神秘的な空間へと変貌させてくれるはずです。そこに生まれる新たな「森の神話」を皆様とともに体感したく思っています。

（学芸員 知野 季里穂）

INFORMATION

「紀の国わかやま文化祭2021」特別連携事業

土屋仁応 森の神話

会場／熊野古道なかへち美術館

観 覧 料／400円

※学生及び18歳未満の方は無料

会 期／2021年10月2日(土)～11月28日(日)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日／毎週月曜日

11月4日(木)・11月24日(水)

開館25周年記念のコレクション展－2

今年度は、田辺市立美術館の開館25周年を記念した近現代美術のコレクション展を4部構成で行う計画にしています。すでに第Ⅰ部「洋画の表現」と第Ⅱ部「織の造形」は年度初の4月から6月にかけて開きました。続く第Ⅲ部「日本画の革新」と第Ⅳ部「水彩画の展開」は、年度末の2月から3月にかけて開催します。

第Ⅰ部では、明治期以降に本格的に流入してきた西洋絵画の手法を受容し、日本人画家自らの表現として描かれた「洋画」の世界をお伝えしました。第Ⅲ部は、それに対置するものとして再編された「日本画」について、旧来の表現を脱却させて同時代の芸術へと革新してきた画家たちの制作に注目して紹介します。

当館には、斬新な表現を取り入れて大正期の日本画の世界に旋風を起こした「国画創作協会」の活動を先導した画家たちと、戦後



大下藤次郎《秋の海(小豆島)》 1910(明治43)年頃

きのくにの三画人



田辺市立美術館は今年、開館から25周年を迎えます。これを記念して、近世画壇で活躍した文人墨客の中でも特に、後世に「紀州の三大文人画家」として名を遺した、祇園南海(1676～1751)、桑山玉洲(1746～1799)、野呂介石(1747～1828)の画業を紹介する特別展を開催します。

第一部では、服部南郭(1683～1759)、彭城百川(1697～1752)、柳沢淇園(1703～1758)とともに日本文人画の先駆者として評価される祇園南海の詩書画を展覧します。南海は紀州藩医・順庵の長男として江戸に生まれ、14歳の時に京都の儒学者・木下順庵(1621～1699)に入門してその詩才を発揮し、22歳で儒学者として紀州藩に仕えました。一時期、不行跡を理由に城下を追われて謫居を命じられますが、後に赦され、来日した朝鮮通信使の応接で功績をあげたことから儒官として藩に復帰、紀州藩校が創設された時にはその校長ともなりました。生涯に亘って多くの文人墨客と交わりながら詩

桑山玉洲《雪山吟客図》 1798年(寛政10)年(公財)脇村奨学会蔵[田辺市立美術館寄託]

画の研究を続け、自らも秀でた才能を創作に発揮しています。

第二部では、画家・画論家として中国絵画に抛らない日本独自の絵画の創造を目指した桑山玉洲の表現に注目します。玉洲は紀州和歌浦で廻船業・両替商を営む昌澄の長男として生まれ、二十代の頃に江戸に赴いて著名な画家を訪ねて絵を学ぼうとしましたが、これに飽き足らず、以後ほぼ独学で書画の研究に励みました。様々な書画を収集、研究する一方、京都の著名な文人画家・池大雅(1723～1776)や大坂を代表する文人・木村兼葎堂(1736～1802)と交流して独自の絵画表現を確立するとともに、自著の文人画論を上梓して世に問い、画論家としても広く知られるようになりました。

第三部では、先人の書画を徹底的に研究しながら山水画の真髄を追求し、当時の紀州画壇に大きな影響を与えた野呂介石の画業を紹介します。介石は和歌山城下の町人・方紹の五男として生まれ、21歳の時、京都の池大雅に入門して画家としての基礎を学びました。後に京都や大坂を行き来し、そこで出会った木村兼葎堂に大きな影響を受けます。47歳の時に紀州藩士として出仕、以後

追悼：日本画家 稗田一穂

稗田一穂さんに初めてお会いしたのは、1997(平成9)年に開催した特別展の際にご来館いただいた折だった。そのときは展覧会の担当者でもなく、当館の一学芸員としてご挨拶したまでだったが、その後、近現代の日本画についても仕事を担うようになり、手紙や電話のやりとりを重ね、ときにご自宅を訪問してお話をうかがうようになった。



1997(平成9)年8月「稗田一穂展」の初日に行われた公開対談の折の稗田一穂さん。今年3月23日に逝去。

藩の仕事を続けながら多くの文人墨客たちと交流し、熊野地方をはじめとする各地を旅して山水画を精力的に描くとともに、多くの弟子たちにその画風を教え伝えました。

本展覧会で取り上げる紀州の文人画は、田辺市出身の慧眼の美術コレクター、脇村義太郎・禮次郎兄弟の収集品の要でもあったもので、両氏の旧蔵品は当館の収蔵品の核の一つとなっています。弟、禮次郎の文人画収集は、当時、中央公論美術出版の社長であった栗本和夫のコレクションを譲り受けたことがきっかけになったと言われていいます。その後、友人であり当時、岩波書店の社長でもあった小林勇の助言なども得ながら、池大雅や青木木米(1767～1833)をはじめとする京坂で名を馳せた作家から紀州や中京を舞台に活躍した作家に至るまで、当時の文人画壇をある程度網羅できるほどの多様なコレクションを形成していきました。一方、兄の義太郎が収集した文人画コレクションは、禮次郎の系統立った収集に対して、あくまでも紀州ゆかりの作家にこだわる中で秀逸な作品を手にしていったものです。

当館ではこれらの作品を軸にして、開館当初から折に触れて文人画をテーマとした展覧会を開催してきました。その中で南海、玉洲、介石それぞれの作家に注目することはありましたが、彼らを「きのくにの三画人」として一堂に紹介するのは本展覧会がはじめてとなります。開館25周年を機に、紀州が誇るこの三画人の業績を改めてお伝えしたいと思います。

（主任 辰巳 充）

ことについて話している途中、ご尊父の納骨に訪れた場所のことを「初めての景色のはずなのに、なぜかとても懐かしい感じがしてねえ」とおっしゃった後、受話器の向こうで声を詰まらせられたことがあった。そのとき以来、当地を故里として意識することが強くなったことをうかがった。

2007(平成19)年に『創画会60年展－創造美術からの流れ－』を開催し、以後「創造美術」を結成して戦後の日本画革新の先頭に立った画家一人ひとりの軌跡をたどる展覧会を企画するようになってからは、度々その運動の只中におられた、かつてのご自身のことや先輩の画家のことについてお聞きし、その都度貴重な証言をいただいていた。

2017(平成29)年の『吉岡堅二展』では、図録にご寄稿をいただくこともかない、後に送られてきたお便りに、「吉岡先生の図録毎日の時間を訪わず何度も拝見時刻を忘れています」と記されていたときは、たいへん嬉しく思うとともに、ある時代の同志の画家たちの関係の残り香にふれたような気がして、少なからぬ感慨があった。

今年の『高橋周桑展』についても、その計画をお伝えし、周桑についての記憶をお尋ねする手紙を出していたのだが、返ってきたのは、期待していたご返信ではなく、思いもかけない訃報だった。もうお話を聞くことはかなわなくなってしまったが、これまでにいただいたご厚情を胸に、稗田さんの生きた時代のことを、これからも深く探り、作品とともにしっかりと伝えてゆきたく思う。心よりご冥福をお祈りいたします。

（学芸員 三谷 渉）

る作品、現代の抽象的な表現の作品など、近代から現代にかけての水彩画の展開を一望するので、この機会にその多彩な表現に触れていただければと願っています。

開館25周年記念のコレクション展Ⅰ～Ⅳを通して、展示する作品はすべて当館の所蔵品です。

作品の収集が美術館の活動の根幹

にあり、コレクションがその館の性格を定める大きな要素であることに着目していただければと思います。25年間の活動の蓄積を通じて、当館の個性も示すことが出来るようになってきているのではないかと考えています。今後もこの活動を継続し、発展させてゆけるように努めます。多くの方にご来館いただき、作品に接したご感想、ご意見等をお気軽にお寄せいただければ幸いです。

（学芸員 三谷 渉）



稗田一穂《蒼壁》 1974(昭和49)年